

犬の肝臓に発生する肉腫の病理学的特徴

二瓶和美¹⁾、鄭 明奈¹⁾、小野澤花純²⁾、柿沼陽子²⁾、山下傑夫¹⁾、
内田和幸³⁾、小野憲一郎¹⁾

1) 日本動物高度医療センター、2) サンリツセルコバ検査センター、
3) 東京大学獣医病理学研究室

【はじめに】 イヌの肝臓における間葉系腫瘍は、肝細胞性腫瘍を含む上皮性腫瘍と比較すると発生が少ない。その多くは造血系腫瘍や血管系腫瘍であるが、稀に未分化な間葉成分から構成される肉腫が認められる。本研究では肝臓に発生した間葉系腫瘍について回顧的調査を実施するとともに病理学的特徴を検討した。**【症例と方法】** 日本動物高度医療センターで2011～2015年に病理組織診断した肝臓腫瘍を回顧的に調査して、腫瘍の発生傾向を調査した。また、肝未分化肉腫と診断した2例については、その構成細胞の特定を目的として、免疫組織化学的検索を実施した。**【結果】** 肝臓の腫瘍は約5年間の調査期間中177例で、うち上皮性腫瘍133例(75%)、肉腫30例(17%)、リンパ腫8例(5%)、組織球性肉腫6例(3%)であった。肝臓が原発と判断された肉腫は30例中13例で、それぞれ血管肉腫5例、肉腫NOS3例、肝未分化肉腫2例、脂肪肉腫2例、悪性間葉腫1例であった。肉腫NOSと診断した腫瘍には、悪性末梢神経鞘腫瘍やリンパ管肉腫に類似した特徴も認められた。肝未分化肉腫は大型の孤在性腫瘍であり、腫瘍細胞は特定の分化を示さない未分化な紡錘形細胞が充実性や粘液腫状に増殖し、腫瘍巣辺縁には肝細胞や胆管が混在していた。本腫瘍の腫瘍細胞はvimentinに強陽性、CD34に陽性、S100に少数陽性、desminおよび α SMA陰性であった。**【考察】** 肝未分化肉腫はヒトでは主に小児に発生する分化を示さない悪性間葉性腫瘍であり、腫瘍の由来は肝芽細胞に含まれる多分化能を有する細胞と推測されている。犬の肝未分化肉腫2例も組織学的特徴が人の腫瘍と類似していた。肉腫NOSや悪性間葉腫も含め、その臨床挙動や発生母地に関する検索が必要と思われる。